

提出日：令和 3 年 3 月 11 日

所 属： 生命・環境科学部 環境科学科

氏 名：久松 伸 職位： 講師

役 職：ネットワーク管理者

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）				
下記の科目を担当しているが、それぞれの科目が学生にとってどのような位置付けになっているかを考え、その科目によって何を学び、それが今後どのように役に立っていくのか（高学年の科目との関係や社会における位置付け）を明らかにした上で、本人のやる気・動機付けを重視している。				
科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
環境植物学	環境科学科	選	2	91
環境修復技術論	環境科学科	選	3	69
機器分析学・同実習	環境科学科	必	2	83
基礎科学実習	環境科学科	必	1	87
リサーチローテーション	環境科学科	必	3	83
化学物質安全管理学演習	環境科学科	選	3	55
地球共生論	全学科	必	1	約 500
科学技術英語	環境科学科	選	3	5
卒業論文	環境科学科	選	3・4	11
2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）				
学生は、通常、カリキュラムにある各科目は進級や卒業に必要な単位の取得を重視してしまいがちであるような印象が強い。しかし、それぞれの科目が何のために学ばなければならないのかという動機付けができれば、学生は意欲的に学習していくと考えている。従って、学科の 3 つのポリシーに則り、この科目は単にこの科目の内容の理解に務めるだけではなく、この科目は他の科目を学ぶためには必要な基礎知識となるなどを述べるようにしている。最近、カリキュラム・マップなどが組織的に作られるようになってきているので、これらを学生がしっかり認識してくれれば、私の担当科目だけでなく、他科目においてもそれらの関連付けを学生が自発的に行えると考えている。				
また、環境に関連する事柄は、日常的にも多くテレビや新聞でも目にする。環境科学科の主題である「環境」は、広い複合的な領域であり、環境科学科で用意しているカリキュラムだけでは到底網羅できるものではない。しかも、科学は常に進化していることから、大学で学んだことだけで今後の世の中の問題解決ができるわけでもない。従って、私の授業ではなるべくポ				

イントとなる事項を理解してもらった上で、今後も興味関心を持続させ、社会に出てからも（職業として直接関与しない事項に出会ったとしても）、この環境に関する科目を発展的・持続的に自学自習につなげてもらいたいと考えている。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

学生の動議付を重視しているため、各授業の冒頭では必ずこの科目は何のために学ぶのかを必ず述べている。この動議付の部分は、授業資料とせずに必ず口頭で述べている。資料を用意すると、多くの学生は「資料があるから聞かなくても後で理解すれば良い」と考えているようにも感じているため、より心が伝わるよう語り言葉として雑談の様なイメージで行っている。また、学生によって既にもっている知識量に差があるため（高校時代の履修科目の違いなど）、あまり踏み込んだ内容で講義を行うと途中からついてこれない学生も出てきて、せっかく興味が湧いた状態が維持できなくなってくる傾向がある。そのため、基本的な事項の講義の後、質問やより詳しく知りたい学生を教卓近くに集め、引き続き講義を行う様にしている。ただし、興味が湧いた状態が維持できているかどうかは、対面式の授業では学生の表情を見ることである程度の判断はできるが、本年度の様な教材のアップロードで行う遠隔授業ではその様な判断がしづらい。

また、担当している科目に関連する事項を新聞やネットニュースで見かけると、その科目が単に単位を取るための科目ではなく、世の中の関心事であり、世間一般の人も情報を得ている内容であることを授業で紹介することで、学生の意欲が高まると感じている(資料 1)。

アクティブラーニングについての取組

本年度は遠隔授業であったため実施できなかったが、前年度はあるテーマについて自分で解決方法を模索した上で、それを数名の学生同士で議論を行ってもらい、最後に教室全体でその内容を紹介し、学生から充実感があつたとの感想を得ている。来年度はなんとかこのようなアクティブラーニングを実施できればと考えている。

ICT の教育への活用

ICT を利用して双方向的な授業を行っていきたいと考えているが、全員の学生が授業で使用できるデバイス等を保有しているわけではないので、現時点では単にパソコンのスライドを利用しているに留まっている。

<p>4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）</p>
<p>① <u>教育（授業、実習）の創意工夫：C</u> ② <u>学生の理解度の把握：B</u> ③ <u>学生の自学自習を促すための工夫：B</u> ④ <u>学生とのコミュニケーション(質問への対応等)：B</u> ⑤ <u>双方向授業への工夫：B</u> <u>※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）</u></p> <p>上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。</p> <p>例年の状況と2020年度では、緊急的なコロナ対応や他の要因によって十分な準備や工夫ができなかった。来年度も一部遠隔授業を取り入れての授業となることが決まっているが、2020年度は全ての学生が教材のダウンロードや閲覧がしっかりできるかどうかなど不明な点が多かったが、教学担当部署などが学生の対応を逐次行っており、その情報共有から、ほとんどの学生がトラブルはあるものの、授業を行う上でデバイスが利用できる状況であることがわかったため、来年度はそれを踏まえた上で授業を展開していきたい。現在、昨年度できなかった板書を取り入れるため、パソコンとタブレットを同時利用して授業を行っていく予定である。</p>
<p>5. 学生授業評価</p>
<p>① <u>授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。</u> 2019年度は対面式の授業であり、2020年度は遠隔式授業で教材のアップロードであったため、単純に反映させることがしづらい状況であった。そのため、十分反映できているとは言い難い。</p> <p>② <u>①の結果はどうでしたか。</u> 2019年度の授業評価（資料2）でとりあえず、評価の良かった事項（「映像があってわかりやすかった」）についてはそれを踏襲した。それが2020年度の授業評価（資料1）につながったかは不明である。</p> <p>③ <u>②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。</u> 次年度は、対面式の授業を一部展開できるため、より心が伝わるような語り口で授業をすすめるとともに、タブレットを併用した板書を試みたいと考えている。</p>
<p>6. 学生の学修成果</p>
<p>① <u>学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</u> 成績の向上というよりは、意欲の向上、興味の持続に引き続き力を入れていきたい。その結</p>

果、成績が向上すると考えられるが、他の教員の取り組みも参考にしていきたい。ただし、各科目の内容について、世間一般のニュースを学生自ら調べる行為については、たとえネットで簡単に得られる情報であったとしても、“自ら調べる”ということ、授業の内容は成績評価のためだけではなく、世の中の関心に直結しているのだという自覚が生まれるので、引き続き取り組んでいきたい。資料はないが、担当している環境修復技術論で、福島原発での放射線処理の現状や、豊洲市場の汚染問題（築地市場の移転問題）など、現在進行系の話題を自ら調べてもらう課題を出している。

② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

2020年度は遠隔式授業であったため、特段の成果や評価は得られていない。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）

各種の FD 研究会に参加している。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

今後の目標としては、担当科目の内容が世の中と同関連づいているのかを学生に理解してもらうために、実際にその関連業務についている外部講師を招き、学生の意識向上を図ってきたいと考えている。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

（資料1）別添：アンケート | 學理_環境植物学 2020.pdf

（資料2）別添：アンケート | 學理_環境植物学 2019.pdf